



疎開義政者の慰霊碑建立

米機の空襲で漂着

50人が死亡、24年目の供養

戦争末期、台湾に疎開する途中、米軍機の空襲を受けて魚釣島に漂着後、衰弱などで死亡した人たちのみたまをまつる「台湾・開石垣町民・遭難者慰霊碑」の建立式が、十日午前十一時から同島北海岸の遭難現場でしめやかに行なわれた。式典には石垣喜興・石垣市

長、新垣仙丞石垣市議会議員、それに遺族代表の宮良当智さんら。参列、石垣市からたずさえてきた水や菓子、くだものを供えて二十四年ぶりに初の慰霊祭を行なった。この日、石垣市から航程十四時間。魚釣島に着いた一行は、遺族代表者の言葉をたよりに、遭難現場に接岸を試みたが、二十四年間も経過しているため各人の記憶がくい違い、そのうえ、つゆ本番

をつける激しい雨あしが島をおお、なかなか見わけがつかなかった。

やっと晴れ間をぬって故・古賀辰四郎氏が建設したカツオ工場跡を見つけ、船着き場からモーターボートで上陸した。疎開者の遭難現場はサンゴ礁が舞台状に広がりはラワン材が打ち上げられ潮さにはラワン材が打ち上げられ潮さいが絶えない。ここに漂着した約百五十人の疎開者たちはクバのシンや長命草で飢えをしのいだ、約五十人が栄養失調で死んだという。

当時ここで過ごした金丸房江さん、石垣市石垣四四、大浜史さん、石垣市新川二三〇、羽地政男さん、平良市宇西里二九九らはしんみり。さっそく、かつての住居跡を見つけ、思い思いに線香を立てて涙ぐんだ。